

豊饒の時代 明治

国立国会図書館所蔵 明治期刊行図書マイクロ版集成

「歴史、地理・風俗、宗教、伝記」

井上克人

1. はじめに

「国立国会図書館所蔵 明治期刊行図書マイクロ版集成」は、国立国会図書館が所蔵する明治期刊行図書約11万点・16万冊の資料をマイクロ化したものであり、収録図書は人文、社会、理工、医、自然科学の全領域にわたり、明治期全刊本の約7割に相当する。多くの資料は酸性紙の利用、あるいは経年による劣化・損耗の危機にあり、保存対策はまさに焦眉の急とされてきたが、国民的遺産ともいべきこれらの明治の文化遺産を、総体として後世に継承し、国際図書館連盟の基本理念の一つでもあるユニバーサル・アベイラビリティ（普遍的利用）の促進を目的として、丸善株式会社が2年有余におよぶ綿密な事前調査と検討を重ね、専用カメラならびにフィルム処理の開発、エンジニアリング思想をベースとした工程管理システムの構築、厳しい成果品検査、等々により、嘗てない高品位マイクロ出版物を完成させた。

この時期の多くの資料は、従来、入手することはもちろん、閲覧することも極めて困難であったが、この資料のマイクロフィルム化により、国立国会図書館の収蔵する比類のない圧倒的な量の資料を簡単に利用できるようになり、これまで研究者が資料収集のために費やしていた労力は軽減されることになった。

本学ではすでに、哲学、経済・産業、教育、政治の4部門が購入されており、その内「政治」部門については、本誌前号で紹介された。今回は「歴史、地理・風俗、宗教、伝記」部門を取り上げたい。各部門の内訳は以下のとおりである。

【歴史の部】

歴史 [308点、511冊、59リール] 日本史 [2,822点、6,556冊、605リール] 東洋史 [511点、2,227冊、145リール] 西洋史 [329点、582冊、69リール] 補遺 [172点、255冊、24リール] 補遺2 [110点、

215冊、24リール]

【地理・風俗の部】

地理・紀行 [560点、87リール] 日本地理 [782点、115リール] 日本地方史・誌 [3,176点、303リール] アジア [449点、62リール] アフリカ [12点、2リール] ヨーロッパ [63点、12リール] 南北アメリカ [96点、15リール] オセアニア・極地 [16点、3リール] 地図 [276点、16リール] 風俗・習慣 [364点、24リール] 補遺 [143点、12リール] 補遺2 [105点、16リール]

【宗教の部】

宗教 [252点、281冊、26リール] 神道 [922点、1,164冊、55リール] 仏教 [1,927点、4,361冊、346リール] 律宗・論宗・華嚴宗 [164点、278冊、16リール] 天台宗・真言宗・密教 [520点、732冊、42リール] 浄土宗 [1,992点、3,011冊、217リール] 禅宗 [578点、735冊、58リール] 日蓮宗 [309点、467冊、37リール] キリスト教 [1,612点、1,731冊、177リール] 補遺 [177点、198冊、14リール] 補遺2 [150点、182冊、27リール]

【伝記の部】

伝記 [1,371点、2,025冊、180リール] 人名録・職員録 [675点、1,458冊、196リール] 姓氏・系譜・家史 [122点、182冊、10リール] 紋章・旗章 [23点、23冊、3リール] 墓誌・碑文 [31点、39冊、3リール] 皇室・華族 [244点、444冊、29リール] 個人伝記（日本人）[1,223点、1,382冊、109リール] 個人伝記（東洋人）[39点、39冊、4リール] 個人伝記（西洋人）[255点、274冊、27リール] 補遺 [130点、143冊、13リール] 補遺2 [71点、200冊、19リール]

以上であるが、本資料は近代日本の歴史研究にとってまさに第一級の資料であり、数多くの埋もれた文献の発掘は今後の研究・調査に測り知れない貢献をもたらすことは必定であり、また近畿圏の、しかも

本学に本資料が設置される意義は極めて大きいと言わねばなるまい。

2. 本資料による研究例

明治は、それまでの政治的、経済的に立ち遅れていた封建社会を、改革につぐ改革によって新しい近代社会に作り上げていった時代であり、今日の日本の基礎を築き上げた豊饒の時代であった。そこには明治政府の為政者らの意識的自己変革のみならず、創造的エネルギーをもった中間層の台頭、更には旺盛な学習意欲と探究心をもって歴史を推進せしめた民衆の存在があったことは無視できない。これらは日本を深く知る上で極めて重要な問題であり、また魅力に富む問題であることは誰しも認めるところであろう。

ところで、特に今回取り上げた各部門から、もう少し具体的な問題として、例えば以下のような研究が可能になろう。(1)明治期における西洋の思想・宗教・文化の受容と、その日本的展開に関する追跡調査、(2)明治期の欧化主義の流れのなかで、わが国の伝統的宗教が外圧や国家の圧力に対して、どのような自己改革によって近代化したかの究明。特に神道についていえば伊勢神宮や出雲大社などの動向、そして天理教、金光教など新宗教の進出過程の調査、(3)キリスト教関係の書物が次々に翻訳されていく一方で、日本の各宗派がその教理・教義の整備を課題としていく経緯の調査、(4)神祇全書や神道叢書の編纂、縮刷大蔵経の企画出版、更に伝教大師全集や禅学大系の編集事業の追跡、(5)親鸞教学における『歎異抄』や道元の『正法眼蔵』、或いは『大乘起信論』等に関する各種仏教書の注解解読の照合、(6)明治期の教育行政制度の確立・整備過程における中央政府と地方当局の交渉、往復文書の実態についての実証的研究、(7)日本を含む太平洋地域の農耕文化の起源・伝播、および伝統的な姿の追跡調査、(8)三療業の営業独占を求めた盲人による国会誓願運動の背景、およびイタコ・ゴゼなど、盲婦人の職業実態の調査、(9)西洋文明の受容によって、それが明治期の為政者の伝統的法意識にどのような影響を与えたかの研究、(10)古今東西の「偉人伝」に寄せる明治人の精神的側面が近代化の流れのなかで、どのように変容していったかの究明など、今後の研究課題とする問題は無尽蔵にある。

3. 明治という時代

さて、本稿では特に明治時代の精神史について簡単に触れておきたい。

周知の如く、日本の近代化は明治維新以後愈々本格化していったが、明治期における西洋近代文明の受容は、これまで伝統的に培われてきたわが国の学問・思想のあり方に根本的な反省を促すものとなった。明治以前の思想的伝統には、もちろん仏教や国学、神道の存在は無視できないにせよ、当時の人々の生活形態や思考様式のなかに最も直接的な体験としてあったのは何と言っても儒教的素養であったことは特に留意すべき点であろう。従来、「日本の近代化」が論及される場合、もっぱら前近代的な封建社会からの脱却という歴史的側面ばかりが強調され、そうした時代状況の中にあっても、明治人の深層意識の中に伝統的な儒教精神が根深く巢食っていたという事実が等閑視されがちであったことは否めない。明治初年に生まれ育ち、明治後期に活躍する思想家たちにとって、その思想の形成の時期に儒教的伝統が極めて大きな比重を占めていたことは念頭に入れておくべきである。それは単に思想形成の一要素というに留まらず、少年時代の生活全体を通して、彼らの精神の内奥に深く浸透していたのである。当時の子供たちは、明治五（1872）年の「学制」発布後創設された小学校に通学する傍ら、近世以来の生き残りの儒学者たちの膝元にあって、直接経書や史書、四書五経等の素読と講釈を受けるという光景は、当時かなり一般的なものであった。明治初年に生まれた知識人の世代が文字を覚え知識欲に目覚めた時、彼らの身の回りにあったのは主に漢籍であり、それによって自らの好奇心を満たすことが彼らの学問的出発点であった。

とは言え、彼らが思想的に活躍する時期にあって、彼らの思想内容の中に即自的な仕方でそうした伝統が表現されるわけではなかろう。むしろこうしたいわば血肉にまで浸透した世界観なり価値観は、もはや直接的な思想表現としては表れてはこないであろうし、更に言えば、表向きは封建時代の前近代的な儒教精神を批判しながら、基本的な発想は相変わらず儒教的であるといった場合も決して少なくないのである。明治期において儒教的倫理の伝統がどのような意味を担っていたかは、例えば山路愛山（1864～1917）の「余は儒教の教理を捨てたり、されど人道と天道とを結合し、道義感情の基礎を不易の位置に据えたる儒教の甘味に至っては遂に全く忘るゝ能

わざる所なりき」(『現代日本教会史論』)という言葉からも窺い知ることができる。

4. 自由民権運動の衰退と精神主義的理想主義の台頭
 ところで明治維新の政治的、思想的リーダーたちは当時の西欧列強のアジア進出の圧力に抗して、日本の独立を守ろうとする意図のもとに、富国強兵、文明開化、殖産興業を推進しようとした。文久二(1862)年、蕃書調所にいた洋学者、西周(1829~97)、津田真道(1829~1902)は、オランダのレイデン大学に留学し、そこでフィセリングから当時のヨーロッパにおいて主流となっていたA・コントの実証主義およびJ・S・ミルの功利主義を教わり、帰国後それを日本に紹介するが、それらは実学を志向する日本の近代化にとっては極めて時宜にかなった学問であった。西、津田をはじめ、福沢諭吉、加藤弘ら「明六社」に結集した洋学者たちは、日本人の生活と思维の方式を近代化していくための思想的な拠点を求めて、西洋近代の実証主義や功利主義思想に着目し、その移植をはかったのである。

しかしそこで提唱される自由、独立、平等、人権といった理念によって、人民に自由独立の「個人」としての自覚が喚起され、やがてそれは反政府的な自由民権運動へと発展していくのだが、明治の中期、つまり明治二十二(1889)年の「帝国憲法」発布によって天皇制絶対主義政権が確立される頃になると、次第にドイツ系統の哲学思想の導入が盛んになる。これは革命運動の温床にもなりかねない英・仏系思想を挫くための政府による自由民権運動対策であった。文部省からの最初の文科系留学生としてドイツに派遣され、E・ハルトマンの形而上学やヘーゲル中央派系の哲学史などを学んだ井上哲次郎(1885~1944)は明治二十三(1890)年帰朝後、すぐに東大教授となり、創生期のアカデミー哲学のリーダーとして、ドイツ系統の理想主義、精神主義的な哲学思想の導入につとめ、前代に移植された功利主義、実証主義を批判、排撃するとともに、日本の伝統である宋儒学や仏教思想も踏まえ、「現象即実在論」の提唱によって東西思想の哲学的総合をめざしている。

5. 明治の青年と人生への煩悶

明治二十年に刊行された『新日本之青年』で、徳富蘇峰は「明治ノ青年ハ天保ノ老人ヨリ導カルモノニアラスシテ。天保ノ老人ヲ導クモノナリ」と猛

語しているが、「天保ノ老人」とは福沢諭吉をはじめとする明治初期の啓蒙思想家たちを指す。彼らの思想の骨格にはまだ確固とした儒教的倫理観があり、その上で主として政治や社会の問題に強い関心を示していたのに対し、「明治ノ青年」たちは、一方では哲学思想そのものの理論的な把握、学術的な受容に努めながら、他方ではとくに倫理的、宗教的問題に強い関心を示し始め、明治三十年代以降になると、近代的個人意識の成長とともに、とくに個人の内面的世界における自我の自覚と確立という問題が追求され始める。いかにして人生の根拠をつかむか、どこに生の根拠を置くかといった「人生問題」への懐疑が知的青年層の間に広がり、この時代を覆う根本気分となっていく。

明治三十六(1903)年に華嚴の滝に投身自殺した一高生、藤村操の「華嚴の辞」に象徴される人生への懐疑と煩悶が、明治のこの時代の根本気分を如実に表している。曰く「悠々たる哉、天壤、遼々たる哉、古今、五尺の小軀を以て此大をはからんとす、ホレーショの哲学竟に何等のオーソリチイに価するものぞ。万有の真相は唯一言にして悉す、曰く、不可解。我この恨を懐て煩悶終に死を決す。」こうした煩悶は藤村一人に限られるわけではない。高山樗牛(1871~1902)も「人生問題」という新しい主題に取り組み、明治二十四(1891)年、『文学会雑誌』の創刊号に掲載された「人生終に奈何」なる一文で次のように吐露している。「人生終に奈何、是れ実に一大疑問にあらずや。生きて回天の雄図を成し、死して千歳の功名を垂る。人生之を以て尽きたりすべきか、予甚だ之に惑ふ。生前一杯の酒を楽しむ、何ぞ須ひん身後千載の名、人は只々行楽して已まんか、予甚だ之に惑ふ。」哲学者西田幾多郎の抱いた煩悶も同一性質のものであった。曰く「宇宙一大怪物ニシテ疑惑ノ中ニ取り包カレ一物解スベキ者ハ毫モナシ 見ヨ夫レ仰テ見ヨ夫蒼穹タル天ハイズレニ至テ限ラルヤ宇宙ハ 或ハ神ハ 何故ニ始ナク終ナキカ 嗚呼無始無終果シテ無キ乎 吾人ハ夢ノゴトキ乎 実ニデカールトヲ気取ルデハナイガ宇宙間 解シ得ベキ者一物カアルヤ 嗚呼何術ヲ以テ之ノ疑ヲ解カン 嗚呼余ノ為メニ之ノ疑ヲ解クノ人アル乎 豈慨嘆ニ堪ベケンヤ」(明治二十一年頃「山本良吉宛書簡」『西田幾多郎全集』第十八巻、五頁)

6. 近代的自我の目覚め 東洋的自然観からの乖離

こうした苦悶は、明治維新以来日本人の精神に浸透し来たった認識論的発想、すなわち自然を対象化し認識する主体としての人間という西洋の近代精神がもたらしたものであり、それまでいわば天地自然の懐に身を委ね任せることに慣れていた日本人であったればこそ、個人的自我の目覚めとともに負わなければならない苦悶でもあった。近代日本における「自我」の定着は、自然とのどうしようもない乖離に伴って重くのしかかり、それは閉鎖した独我論に陥る危険性を孕んでいた。こうした独我論からの脱却こそ「明治ノ青年」の思想的課題だったのである。このような風潮に支えられて、大多数の知識人は内観的な自己凝視を基調とする人格形成の途を歩むようになる。明治三十三（1900）年に当時の著名な哲学者、思想家の殆どが参加する形で結成された「^{ていゆう}丁酉倫理会」もその一つの現れである。この会の趣意書には次のように謳われている。「道德の大本は人格の修養にあり。忠君愛国は国民^{かんが}道德の要素なりと雖も、而かも人生の本然に稽へて其自覚心を覚醒し其衷心に訴ふるに非ざれば、恐らくは生命ある活動を庶幾すべからざらむ。」ここには新しい人格主義的な個人主義の立場から従来の「国民道德」を再編成しようとする意図が表明されている。

以後、新しい人格主義的な個人主義が標榜され、カント、フィヒテ、T・H・グリーン、パウルゼンなど人格主義的理想主義の倫理学の紹介や研究が盛

んに行われた。明治三十年前半には感情や本能に基づく自己主張としてのロマン主義的個人主義が生じるが、この潮流は日露戦争前後には、社会的現実には伏在するの諸矛盾との葛藤から、いわゆる自然主義文学が起こり、他方では自律的な人格としての自我の実現をめざす倫理的理想主義、あるいは超人格的な絶対者との合一による自我の解脱を提唱する清沢満之（1863～1903）の「精神主義」、宗教的法悦を説く綱島梁川（1873～1907）の「予が見神の実験」（1905年）などの宗教的精神主義も現れてくる。またこうした流れの中で、わが国のアカデミー哲学の主流はドイツ観念論の哲学に依拠した絶対的観念論の方向へと進んでいく。明治四十四（1911）年に公刊された、西田幾多郎の『善の研究』はこうした潮流の起点となった著作であった。

（文学部教授 いのうえ かつひと）

平成12年度に文部科学省より補助金を得た資料は、上記の1点と下記の2点である。

The Eighteenth Century(18世紀英語出版物コレクション)Unit 295-305. 385reels.

『籍苑』第38号「マイクロ・フィルム版18世紀刊本文献集成」参照

Carl Menger Collection. 第9セクション：歴史学 195 reels.

『図書館フォーラム』第2号「カール・メンガー文庫（マイクロ版集成）について」参照